

## ペトロの救出 / 祈りの共同体

ペトロは逮捕投獄され厳重な警戒の下に置かれた。こうしてペトロもまたヤコブ同様に、衆愚にのって自己の保身を図る為政者ヘロデの横暴な政策の犠牲になるかのように見えた。人間的に見ればもっとも絶望的と思える状況の中で、教会ではペトロのために熱心な祈りが神にささげられていた(12:5)。その祈りに神は応えられた。ペトロは奇跡的方法で牢獄から救出された。

その経緯を描いたルカの筆致は感動的である。その場の興奮ぶりが目に浮かぶようである。我に返って驚き、激しく興奮しながらマリヤの家へと急ぐペトロ / 激しく戸を叩くペトロ / その音に、取り次ぎに出て来たロデという女中が、ペトロだと分かって、喜びのあまり戸も開けもしないで、家の中に駆け込んで行く / ペトロが門口に立っている。と報告するロデを「お前は気が狂っている。」と言って信じようとしぬ弟子たち / なおも必死になって戸を叩き続けるペトロ / ペトロを見た時の人々の驚き / 彼らの興奮を手を振って静め、一切のことを報告し闇夜に消えて行くペトロ。」

ルカの記述は、臨場感に溢れている！ 実際に目の前に起っていることを見ているかのように、読みながら私たちも興奮を覚える。専門家も指摘していることであるが、これは、実際に体験した人、現場にいた者でしか語れない——或いは、そういう人達から、実際に聞いた者でなければ書けない、実に生き生きとした描写である。

私たちは、ここから二つのことを教えられる。第1は、祈りの共同体としての教会の姿である。ペトロが逮捕され、もうすぐ処刑にされるかも知れないとい絶望的な状況の中で、教会は彼のために熱心に祈り続けていた」とある。ここに私たちは「聖徒の交わり」としての教会の具体的な在り方を見る。喜びも悲しみも共に担い合う教会の姿である。祈ってくれる兄弟姉妹がいるということはどんなに大きな慰めであることか。私たちが主の日毎に教会に集まり一週間の恵みを共に分かち合い、また重荷や苦しみも分け合って、共に礼拝をささげ、祈り合い、一週間の生活に踏み出して行く、何と素晴らしい恵みであることか。

第2は、彼らはペトロの為に熱心に祈った。そして神はそれに応えて下さった。しかし、いざペトロが救われ、彼らの所にやって来たとき、彼らは、まさか、そんな事がある筈がない！と信じなかった、というこの事である。祈っているが、心の中で、そんなことが起るだろうか、そんなことになるだろうか？と疑いながら祈っている。滑稽なように見える。しかし、これは私たちの姿でもある。私たちが同じことをしばしばするのではないか。

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認することであるとヘブル書の記者はいう(11:1)。まだ私たちは事実を見ていない、しかし、神の約束を信じ切って祈るのである。現実には厳しいけれども、神は必ず道を開いて下さる、必ず解決を与えてくださる——そう信じて祈るのである。勿論、全てがこちらの祈り通り成るとは限らない。神の思いは私たちの思いをはるかに超えている。神には神の御心があるであろう。しかし、どういふ心であれ、それが神のみ心と信じて、従っていくのである。